様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成２５年　５月１１日現在

機関番号：３３３０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：２０１１～２０１２
課題番号：２３７６０６１３

研究課題名（和文）　聖興寺伽藍再建に見る近代寺院建築技術の継承と地方伝播に関する研究

研究課題名（英文）　A study about the succession and the district spread of modern times temple building technology in the rebuilding of shokoji temple.

研究代表者　山崎　幹泰
（YAMAZAKI MIKIHIRO）
金沢工業大学・環境・建築学部・准教授
研究者番号：１０３２９０８９

研究成果の概要（和文）：
白山市にある浄土真宗寺院聖興寺は、明治 24 年に堂宇を焼失した後、東本願寺本堂再建棟梁の木子棟斎が棟梁を務めて、明治 31 年に本堂が再建された。木子は再建中に亡くなったため、その後を木子のもとで東本願寺に関わった、荒木保太郎が棟梁を引き継いだ。その後、客殿、庫裏などの再建が、大正 7 年まで続けられた。これら一連の建築の実測図面を作成し、関係資料の収集、分析を行い、建築の特徴と価値および荒木の履歴について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
The building of Shokoji, Jodo Shinshu temple in Hakusan city, was destroyed by fire in 1891. Tosai Kigo, he was Master carpenter of Higashi-Hongwanji temple main hall rebuilding, rebuilt the main hall of Shokoji in 1898. After the death of Kigo, Yasutaro Araki, he was disciple of Kigo, succeeded his work. Shokoji reception hall, and priests' quarters were rebuilt in 1918. I made measured drawings of these buildings, did collection and analysis of a document, and made clear it about characteristics of these buildings and value and a history of Yasutaro Araki.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	2,000,000 円	600,000 円	2,600,000 円

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠
キーワード：建築史・近代和風

１．研究開始当初の背景
聖興寺は、白山市中町 56 に位置する、浄土真宗大谷派の寺院である。その歴史は、明応 3（1494）年、明源法師により石川郡御手洗村徳光に中野山徳光寺を創立したことに始まる。明源法師は俗名を徳光弥二郎政明といい、加賀国守護・富樫政近の家臣であったが、文明年間に蓮如上人の弟子となった。第三世住職の文禄 4(1595)年に聖興寺と改称した。慶長 6（1601）年、石川郡宮保村に移転。慶安元（1648）年、現在地に移転した。江戸時代中期に活躍し、「朝顔や釣瓶とられてもらひ水」の句で知られる千代尼（女）（元禄 16 年（1703）～安永 4 年（1775））が在世中、同寺に足繁く通ったとされ、俳諧に縁が深い寺院としても知られる。境内には辞世の句を刻んだ千代尼塚や、百五十回忌に建てられた千代尼堂・草風庵などがある。
明治 24 年（1891）5 月 11 日早朝に失火、鐘楼のみを残して堂宇を全焼した。本堂再建にあたっては、幕末・明治の京都で活躍し、京都・東本願寺本堂再建の棟梁でもあった木子棟斎が棟梁を務め、棟梁代勤・荒木保太郎（金沢市）、大工・武田弥平（松任町）らが参加

した。
木子は再建中の明治 26 年（1893）4 月 13 日に 67 歳で亡くなった。そのため、その後を棟梁代勤（代行）として、荒木保太郎が工事を引き継いだ。明治 31 年 11 月 7 日に本堂上棟式が行われ、その後は荒木が引き続き客殿、庫裏等の再建に関わり、大正 7 年（1918）に一連の建物が竣工した。
申請者は平成 20・21 年に行われた石川県近代和風建築総合調査に際し、これらの遺構の調査を担当した。その結果、本堂は大工棟梁・木子棟斎の最晩年の遺作であり、客殿、庫裏も質が高い建築で、かつ多くの図面資料なども残されていることから、非常に貴重な建築遺構であることを確認した。しかし、近代和風建築総合調査の枠内という限りある時間と資金の中で、調査は充分に行い得なかった。実測平面配置図の作成と写真撮影、周辺資料の収集に着手できたのみであった。技術的特徴に関する分析や、客殿、庫裏などの付属建物の調査、周辺資料の調査などは、不十分なままとなっている。
２．研究の目的
本研究の目的は主に以下の２点である。
①聖興寺の建築遺構の詳細な記録を作成し、その結果に基づき復原考察と技術分析を行う。実測調査を行うことにより、主要な建物の各種図面を作成し、まずは記録による保存を行う。また、復原の前提となる痕跡調査もあわせて行い、次頁に記す多くの図面資料などとあわせて、設計変更の過程や竣工後の建物の改築経緯を明らかにし、当初建物の復原考察と、歴史的・建築的価値の評価を行う。
②聖興寺の建築に関する資料を収集、分析し、技術的背景を明らかにする。
聖興寺伽藍再建に関する主要な図面は、棟梁代勤・荒木保太郎から資料一式を譲り受けた工事関係者の子孫である喜多卓郎家（白山市）に残されている。聖興寺には「昭和十七年寺院規則認可申請関係書類」という書類群があり、昭和 17 年当時の境内全建物の平面図を含む多くの資料が残されていた。なお、本堂の棟札は既に発見されているが、その他の建物の棟札は未確認である。
これらの資料により、本堂再建の当初設計から、庫裏・客殿の再建、その他境内建物の整備過程と、使用状況などが明らかになることが期待できる。また、木子の没後、棟梁を引き継いだ荒木が、その経験を活かしてその後どのような活躍をしたか、あわせて分析する。
３．研究の方法
本研究の対象は、白山市中町 56 聖興寺に所在する建築群である。まずは、これらの実測調査を行い、詳細な寸法を入れた実測図面を作成する。一方、周辺資料の収集として、主に図面資料を蒐集する。既に聖興寺と喜多家が所蔵する図面を確認しており、部分的に撮影を行っている。木子棟斎が棟梁を務めた東本願寺本堂は『明治造営百年東本願寺』などの公刊資料があり、作成した実測図面との比較分析を行う。また、収集した資料から、荒木保太郎が関係する建築作品を分析し、聖興寺伽藍の再建工事が後世に与えた影響を明らかにする。
４．研究成果
(1)建築の実測調査を行い、実測図面を作成した。平成 23 年 6 月から 7 月にかけて、聖興寺本堂、客殿、庫裏の実測調査と建物の写真撮影を行った。建物の規模が大きいため、実測の補助として、三次元レーザー計測による本堂の立面画像を作成した。これらをもとに本堂の正面・側面立面図、梁間断面図、および、客殿・庫裏の正面立面図を作成した。

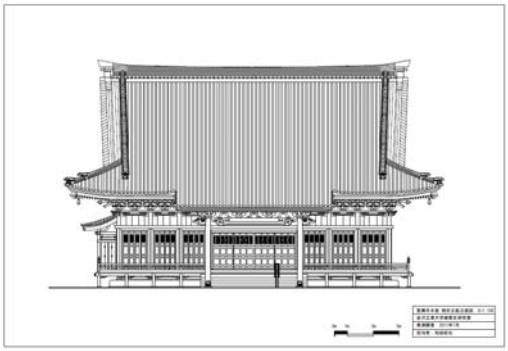

図 1. 聖興寺本堂実測正面立面図

図 2. 聖興寺本堂側面レーザー計測画像

主要建物の概要は以下の通りである。
［名称］ 本堂
［建築年代］明治 31 年（1898）
本堂は、入母屋造平家建桟瓦葺きで南面する。平面は、正面九間側面八間の母屋の正側面に浜縁を回し、背面には香部屋などが並ぶ下屋を設けている。後堂の左手に経蔵、右手に庫裏が接続する。
平面は、正面七間側面二間の外陣の周囲に設けた幅一間半の広縁を室内に取り込んでいるが、拭板敷きのままとする。柱は側柱、入側柱とも円柱で区別はない。矢来内は幅一間半で両脇に端の間を設ける。内陣は後門形式

で奥行き三間半、さらに半間下げて脇仏壇を設ける。内陣両脇に余間、御簾の間、飛檐の間を備え、左手余間の端に切戸口を設ける。内外陣境の欄間彫刻は、立体的で表現豊かな飛天の透彫彫刻で、越中井波の岩倉理八の作と伝えられるが、墨書などは見つからなかった。内外陣境と内陣の軸部は黒漆塗りとし、内陣壁面は金紙張りとする。内陣天井は、二重折上格天井を三手先組物の詰組で支える構成になっている。須弥壇が宮殿形式でなく、羅網付き天蓋とするのは珍しい形式で、須弥壇背後の壁面裏には木村杏園作の獅子の図が描かれている。内陣脇檀の菱形の装飾や余間の格狭間の意匠は、東本願寺本堂のものと共通している。

軒下の組物は二手先の禅宗様組物を詰組としており、広縁の化粧屋根裏に拳鼻が大量に並ぶなど、華やかである。隅木下の竜頭の尾垂木や、向拝の篭彫の手挟などにも優れた彫刻が見られる。堂内外陣周りなどの蟇股は内部に彫刻を施さず、空白としているが、輪郭や足先の彫刻は東本願寺本堂のものと酷似する。また脇障子の竹の節欄間の図柄にも共通するものが見られる。虹梁、蟇股、木鼻装飾などにおいて共通する特徴が確認でき、設計における木子の強い関与が確認できた。

また、建築実測調査の結果と聖興寺関係図面とを照らし合わせて分析を行ったところ、図面と実際の建物の差異を確認でき、設計変更があったことが明らかになった。本堂軒廻りについて垂木の本数に変更があり、木子棟斎による当初設計図面では広縁の柱間が正面側面とも 12 枝で計画されていたのに対し、現状の建物では 13 枝となっている。また、図面にはその変更の旨を記した付箋が付けられ、かつその箇所には「あらき」と記された印鑑も捺されていることから、荒木保太郎による設計変更であることが明らかになった。一方、その点を除いては、木子の当初設計の寸法計画に忠実に従って、本堂が建てられたことも確認できた。

［名称］ 客殿

［建築年代］大正 7 年（1918）

本堂の東側に位置し、本堂とは二本の廊下で結ばれている。正面に大式台を構え、その北側に華の間と呼ばれる二室続きの仏間、仏間の東は畳廊下を経て中庭、中庭の北に客殿、中庭の南に応接間を配置する。大正 7 年に庫裏、茶室などとともに再建された。ただし、聖興寺所有の「昭和十七年寺院規則認可申請関係書類」には、「書院　前口五間奥行九間大正七年庫裏再建ニ当リ之ヲ庫裏（一）ノ中ニ収メ従テ別棟ナラズ」との記述がある。明治 24（1891）年の火災で鐘楼以外を全焼したことから、その直後に最初に再建したのが書院で、客殿はこの書院を組み込んで大正 7 年に再建したということであろう。昭和 17 年の書類の付図では、現在の客殿、仏間、大式台、応接間を含む部分が庫裏（一）に相当し、現在の客殿を「書院」と記していることから、客殿が当初の書院にあたると考えられるが、火災直後の再建とするにはやや疑問も残る。火災直後の再建であれば住居部分が優先されるであろうと考えると、現在の仏間が当初の書院であった可能性も考えられる。

大式台は、間口二間、向唐破風造り銅板葺の式台玄関で、正面にはおさ欄間と虹梁の間に、獅子とボタンを描いた透彫彫刻をのせる。式台玄関の戸は舞良戸四枚引き違い。両脇一間は花頭窓型の格子窓とし、板庇を付ける。六畳間と廊下を経て、十二畳半の次の間と十畳の仏間で北側に床の間と仏壇を設ける。仏壇は地袋付きの床脇に収めた背の低いもので、先述の通り当初の書院を改造したためとも考えられる。仏間と次の間の境は現在開放されており、長押の上は竹の節欄間とする。西側は板縁、東側は畳廊下の鞘の間とする。

客殿は、鞘の間から続いた仏間の北東側にあり、十二畳半二室と土縁、四畳半の水屋、鞘の間からなる。北側の間は、北側に間口一間半の床の間とその脇に付書院を設け、向かって左側に花頭窓型の戸口を設け、赤い房を付けた襖を二枚入れる。南側の間は、西側一間半に地袋付きの違い棚を設ける。この違い棚は、木口に中国風の飾り金物や鱗模様の漆塗りを施すなど、大変手の込んだものであり、明治の火災時にも持ち出して救出したものと伝えられる。また畳は、二室とも赤縁の畳を用い、床の間の畳は繧繝縁としている。これは、明治 7 年 5 月 31 日、順徳天皇の御神霊を収めた唐櫃を佐渡から伏見へ運ぶ奉迎使一行が当寺に宿泊したことにより、許可されたと伝えられる。建具は腰高障子とし、二室境の欄間は漆塗りと螺鈿を施した松皮菱欄間、壁紙には金紙を用い、蟻壁長押を回し、天井は黒縁の格天井とする。材はいずれも上質で、大変豪華かつ格式高い書院座敷として整えられている。西側には九畳の鞘の間、東側には四間の土縁を設け、中庭に面する。土縁の北は便所、南は四畳半の水屋とする。客殿の北側は廊下で、西へは鉤の手に折れて本堂の後堂へ、東へは茶室へと通じる。

大式台の東には、八畳の応接間と五畳半の控えの間を設け、その東側は廊下を経て座敷と、南側は中玄関と接続する。

屋根は、大式台の部分が切妻造平入り千鳥破風付き、仏間から客殿にかけて切妻妻入の大屋根をかけ、客殿の北側は寄棟屋根とする。なお、棟札は確認されていないが、本堂の図面とともに客殿・庫裏の計画図面の一部が、工事関係者の子孫のお宅に残されており、木子棟斎の後を受けた荒木保太郎が、本堂工事に引き続き、設計および棟梁を務めたものと思われる。

［名称］ 座敷
［建築年代］大正 7 年（1918）
境内の東側に位置し、客殿、庫裏、および茶室と廊下で結ばれている。大正 7 年に客殿、茶室などとともに再建された（「昭和十七年寺院規則認可申請関係書類」による）。庫裏の中玄関から裏玄関へ向かう東西に走る廊下の北側に、一階は六畳から十畳の和室六室と、北側の中庭に面した土縁、東側の廊下を配置する。六室は、西側四室（北西から反時計回りに、床の間付き十畳間、階段押入付き八畳間、押入付き六畳間、床の間付き八畳間）が建具を除けば一室になるのに対し、東側二室（北に押入付き八畳間、南に押入付き六畳間）との境は押入と床の間で仕切られ、北側の土縁と板縁も同じく板戸で仕切られており、空間が明確に分けられている。各室とも長押は回さず、建具や壁にも装飾的な要素は少ないが、土縁の縁板の一部には船板が用いられ、土縁と板縁との境の板戸には四隅に飾り金具を付け、脇障子型の扉框を設けるなど、やや装飾的である。
昭和 17 年の書類の付図によると、西側の部屋は客間と事務室、東側二室は配膳所となっており、主に西側四室が客座敷、東側二室が食堂として用いられていたものと思われる。東西二ヶ所の階段は二階南側の廊下につながり、二階も一階と同じく六室からなり、北側にも廊下を設ける。東側階段の南に、後補の物干台と屋外通路を設けて、庫裏の二階と結ぶ。二階の屋根は、寄棟造桟瓦葺きとする。
［名称］ 庫裏
［建築年代］大正 7 年（1918）
境内の東側、客殿・座敷の南側に位置する。座敷と同じく、大正 7 年に再建された（「昭和十七年寺院規則認可申請関係書類」による）。西側に中玄関と玄関を設け、その間を千代女に関する品を展示する遺芳館とする。中廊下に面した中庭の廻りに四室、その廻りにコの字型の廊下を配し、さらに茶の間、食堂、厨房などを配置する。ただし、これらは後世の改造によるもので、昭和 17 年の時点では玄関から土蔵にかけて、広い土間（一部石敷）が通り、井戸や釜場が設けられ、床上は多くが板間で、広い炊事場や台所が設けられていた。
また、二階は西側半分が広い板間とそれに付属する押入で、その東側に広い廊下を挟んでさらに二室を配する。この板間は、もとは床の間付き三十一畳半の間と板縁からなっており、講堂と宿泊所を兼ねていた部屋で、門徒の団体や北陸線が不通になった際、多くの旅客を宿泊させたことがあるという。現在の押入は、台所上の吹き抜けであった。屋根は切妻造桟瓦葺き妻入りで、妻面にはアズマダチのような梁組を見せ、梁の下には舟肘木を入れる。二階正面には四間にわたって、粗い格子付きの窓を設ける。
(2)聖興寺再建に関する資料の収集と分析を行った。喜多卓郎家に残されていた図面資料一式を借り受け、スキャナーとデジタルカメラにより、電子画像化した。対象となる資料は 523 点あり、うち聖興寺に関する図面・資料と確認できたものは 25 点であった。すべての画像について基本情報を整理したカルテを作成した。主な資料は以下の通りである。
(a)「明治二十五年八月八日　木子棟斎　中野山聖興寺　御本堂再建作事　一件容　十分壹建絵図壹枚相添」
(b)「本堂五拾分壹之図　明治二十五年一月吉日　番匠　武田弥平政篤」
(c)名称なし、内外陣境柱（末六番柱）周囲の納まりを示した平面原寸図　日付なし、「木子棟斎撰」とある
(d)「向拝掛尾納リ之図　二十七年六月下旬　荒木保太郎」
(e)「香部屋地図　香部屋足竪指図」年月、記名なし
(f)「本堂瓦葺地割正寸書入之図　明治三十二年二月上旬　棟梁　荒木保太郎」
(g)「大棟獅子口正寸之図　明治三十二年一月　棟梁荒木保太郎撰」裏は小屋組伏図と見られる。
(h)「明治三十三年十月中旬　御書院庫裏御試之図」(c)の裏に描かれている。
(a)は紙袋の表に上記の内容が記され、その中に「聖興寺御本堂地絵図」が 2 枚綴じで入っている。「十分壹建絵図」は、かなり大きな絵図と思われるが、残念ながら見つからなかった。御本堂地絵図は、一枚目に各柱間寸法と部屋名、垂木枝数、虹梁の有無が記され、二枚目に各部屋の畳数、天井の仕様、組物の仕様、建具の種類と数が記されている。
また、木子の図面より前に武田によって作成された建図（側面図）が(b)であり、当初計画と思われるが、木子設計のものより一回り小さく、柱間も合わないことから、別の寺院の図の可能性もある。(c)の原寸図には「木子棟斎撰」とあることから、別人が作図し木子が承認したものと見られる。以上より、基本設計を木子が行い、詳細設計を荒木、武田らが行ったが、原寸図に至るまで木子が決定していた状況がうかがえる。
また、(a)に関係する資料が京都大学所蔵木子棟斎和書に含まれていた。「中野山聖興寺御本堂木寄積帳」は(a)の図面に対応した部材拾い出し集計表で、作成日は明治 25 年 7 月、木子棟斎の名前と印が表紙に付されている。また、資料中に明治 25 年 9 月 17 日釿始の式次第も含まれていた。大番匠に柴田匠之介、武田弥平、奉釿に荒木保太郎、木直シに荒木仁三郎の名がある。柴田匠之介（匠之輔）、荒木仁三郎は、荒木とともに東本願寺本堂再建に関わった大工であり、木子棟斎の紹介で

東本願寺本堂の関係者を参加させた状況が伺える。
(3)荒木保太郎の履歴について調査を行った。荒木は30代から40代前半にかけて、東本願寺造営に関わった後、聖興寺再建に関わったことが明らかになった。東本願寺明治度造営は、明治13年10月釿始、明治22年5月大師堂上棟、明治25年11月本堂上棟、明治28年遷仏式である。荒木の名前は、『東本願寺明治造営百年』（真宗大谷派本廟維持財団、1978）によると、「両堂釿始式次第」（明治13年 10 月）に加賀・荒木保太良とあるのが最も古く、表記が異なるが本人の可能性がある。なお、同じく加賀・荒木乗階という名も見られ、一族であると考えられる。同じく「両堂係大工姓名簿職人部（明治十七年度）」には「明治十五年　十一月二十四日　五等　荒木保太郎（三十五年）　石川県金沢区玉川町」とあることから、荒木の生年は嘉永 3 年（1850）頃と考えられる。明治22年5月「大師堂上棟式工匠参列」には「麻上下五等匠同（本堂大工）　荒木保太郎」、「本堂立柱工匠参列書」（明治23年5月）には「奉水役　大紋　荒木保太郎」とある。本堂棟札（明治25年 11 月）には「肝煎工匠　荒木保太郎」とある。
また、荒木は明治24年1月に造家学会（現在の日本建築学会）に準員として入会した。入会時の住所は「西京下京区不明門通五條南木子方」となっており、同住所・同時入会が荒木のほかに 20 名いた。いずれも、木子棟斎の元で東本願寺造営に関わった建築技術者とみられる。同年 7 月発行の建築雑誌 55 号に、荒木が投稿した寄書「琴堂」が掲載されている。明治27年12月に学会を除名。除名時の住所は、西京下珠数屋町間ノ町西になっている。
さて、聖興寺の火災は明治24年5月、翌25年8月までに木子が聖興寺本堂の設計を終え、9 月に本堂の釿始が行われた。釿始では大番匠に柴田匠之介、武田弥平の名があり、荒木は次席の位置づけだったが、木子の死後、棟梁代勤に昇格したと見られる。
聖興寺本堂竣工後の明治 33 年、松任金剣宮（白山市西新町）の本殿屋根葺替えの棟札に「棟梁　荒木保太郎」の名前を確認できた。その後本殿は平成元年に再建されたため、現存していない。これより後の荒木の活動については明らかにできなかった。
一方、聖興寺再建の後、荒木から聖興寺に関する書類一式を託された喜多家では、二代・喜多源右衛門（嘉永 4 年（1851）生まれ）、三代・治三郎（明治15年生まれ）、四代・栄吉（明治 36 年生まれ）が聖興寺関係の営繕に代々携わってきた。喜多家では聖興寺のほか、地元の建築に多く携わった。喜多家図面からは、北陸企業銀行松任支店（洋風の土蔵造り）、松任警察署（明治 20 年、木造）、若宮八幡神社神輿ほか、数多くの神社、寺院建築を手がけていたことが判明した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
山崎幹泰、「聖興寺客殿・庫裏ほかの大正 7 年再建について ： 加賀地方の近世浄土真宗寺院建築に関する研究(3)」、日本建築学会北陸支部研究報告集、査読無、第 54 号、2011 年、559～562 ページ

６．研究組織
(1)研究代表者
山崎幹泰（YAMAZAKI MIKIHIRO）
金沢工業大学・環境・建築学部・准教授
研究者番号：１０３２９０８９
(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：